

「外国につながる子どものことばを育てるワークショップ」第6回実践報告

—文字を活かす活動に焦点をあてて—

李櫻柳（お茶の水女子大学大学院生）

姜芳雨（お茶の水女子大学大学院生）

王丹叶（お茶の水女子大学大学院生）

朴怡霖（お茶の水女子大学大学院生）

1. 本ワークショップについて

目的：日本に在住している外国につながる子どもに対し、日本語と継承語（親から継承した言語）の発達を促すような支援を行い、両言語や両文化に親しむ機会を増やす。

実践対象：日本に在住している外国につながる子ども。これまでの参加者は就学前後の子どもが多く、国籍も様々である。

実施期間：年2回行っており、すでに6回活動を実施した。毎回参加者は異なるが、継続して参加する子どももいる。

支援者：お茶の水女子大学博士前期課程の大学院生を中心に、日本人学生や留学生がボランティアとして参加している。

活動内容：多言語での絵本の読み聞かせ、子どもの発話を促すゲーム（オリエンテーリング、福笑い、買い物ごっこなど）、子どもが楽しめる作品づくり

2. これまでのワークショップ

第1回目での活動は、作品づくりを中心に行った。しかし、十分なインプットがなかったため、子どもたちから自然な発話を引き出すことができなかった。これを反省点として、第2回目は、活動を始める前に絵本の読み聞かせを取り入れた結果、前回よりもアウトプットが多くなった。しかし、支援者がインプットを重視し過ぎたため、子ども達にかかる負担が多くなってしまった。第3回目の支援会では、楽しい雰囲気の中で両言語の使用を促すため、ゲーム形式を取り入れ、自然な流れの中でインプットを与え、子どもたちからもアウトプットを引き出すことができた。そして第4回目は、聞く・話す活動だけではなく、文字認識にも注目した。読み聞かせをした後、絵と文字が書かれた紙を使ったマッチングゲームなどを通して、日本語と継承語の文字の違いに対して、気づきを促した。さらなる自然なアウトプットを促すため、第5回目のワークショップでは、子ども同士のコミュニケーションに着目した。

3. 第6回目のワークショップ

本発表で報告する第6回目のワークショップ（2018年10月実施）は、休日の午前中に2時間行ったものである。参加者は中国につながる子ども3人とその保護者で、子どもの年齢は4歳、6歳、7歳である。前回までのワークショップと比べ、今回のワークショップは特に、子ども同士のコミュニケーションを重視しながら、文字にも親しめるような活動を設けた。また、第5回目の活動を踏まえ、ワークショップへの保護者の参加がより多くなるように工夫した。そして、子ども達の年齢に合わせ、彼らが楽しく遊びながら、母語・継承語（中国語）のインプットとアウト

トプットができるようなゲームを設定した。

最初の20分間は導入として日中両言語で絵本の読み聞かせをした。その後、ウォーミングアップ活動として「ジェスチャーゲーム」を行い、メイン活動である「オリエンテーリング」を行った。なお、ジェスチャーゲームとは司会が提示した単語を、ジェスチャーを使って表現するものであるが、この活動には親にも参加してもらい、親子と支援者がグループになって活動することで、保護者の関わりを増やすという目的にも沿っていると考えられる。

10分間の休憩後、メイン活動の「オリエンテーリング」を行った。「オリエンテーリング」とは、廊下や教室にそれぞれ異なるタスクを行うポイントを設置し、そのポイントを子ども達で周るというゲームである。タスクは子どもの言語レベルに合わせ、中国語か日本語で提示し、どちらか一方の言語で正解できた場合は、スタンプが一つもらえるようにした。このメイン活動は、子どもが自由に両言語でゲームを体験してもらうことを目的としている。最後は発表会兼表彰式を行い、子ども達にこのワークショップで面白いと思ったことや感想などを言ってもらい、支援者が手作りのメダルを記念として子どもに渡した。

3.1 事例報告 Aちゃん（中国ルーツ）

メイン活動「オリエンテーリングゲーム」の一つのポイントでは、「なぞなぞ」を行った。Aちゃんはすぐに日本語で書かれたお題を理解し、素早く正解することができた。そのお題はAちゃんにとって簡単すぎると思われたため、次は中国語で書かれたお題の紙を見せ、読めるかどうか聞いてみると、突然無口になってしまった。そのため、支援者が読んであげると、内容を理解することができた。また、中国語で「掃除機」は「吸尘器」ということも理解することができた。これは、自然な流れの中で日中両言語のインプットが与えられた一例であると考えられる。

4. まとめ

家庭内での継承語の使用に関して、「聞く」「話す」機会に比べて、「読む」「書く」機会は少ないと考えられる。もちろん「話す・聞く」能力は重要だが、子どもの継承語を伸ばすという観点からみると、家庭内でその言語を話したり聞いたりするだけでは不十分である可能性がある。そのため、文字と音声をマッチさせる活動等、文字の認識に力を入れることも、非常に重要だと考えられる。

今回のワークショップでは、文字に触れる活動を通して、遊びながらインプットを与え、アウトプットを促せるように試みた。そのため、子どもに負担をかけることなく文字に触れ合うことができたと思われる。

5. 今後の課題

子どもの継承語の読み書きの力を伸ばすためには、どのような活動を行うことが効果的か、さらに、検討していきたいと考えている。

今後の目標として、継承語を用いた活動を通じて、子ども達が自文化の価値を自ら感じられるようになることが挙げられる。これは家庭内での言語活動や親の教育観などにも深くかかわっていると考えられるため、一回の活動だけで達成できるものではない。今後も、この活動を長期にわたって実施することにより、目標に近づいていきたい。